



小林 慶一郎 教授

専門:マクロ経済学、金融

(インタビュアー:菊井・古郡)

『ゼミの分野は金融、先生の研究内容は……！？』

Q. 小林先生の専門とされている研究内容を教えてください！

主な研究内容は理論のマクロです。その中で大きく分けて4つの研究をしています。1つ目はDSGE型のモデルについて金融制約を入れるモデルというのを作成する研究です。2つ目に、銀行危機のモデルに関する研究を行っています。そして3つ目は2005年頃から流行っている、貨幣理論というものを研究しています。最後の4つ目は、まだ学術研究まで発展してはいませんが、財政のモデルについての研究も行っています。

『バブル後の不況をどうにかしたい』

Q. 小林先生はいつから経済学に興味を？

最初から経済学に興味があったわけではありませんでした。広く社会の役に立つ仕事をしたいと思い、大学院の計数工学科を修了した後、通産省（現経済産業省）に入省し行政の仕事を7~8年していました。そのときは、ちょうどバブル崩壊直後で、私も景気対策に携わりました。経済政策の経験を重ねるうちに、日本がバブル後の不況から脱却するにはどうしたらいいのだろうか、という思いから経済学に本格的に興味を持ち、経済学を学ぶためにシカゴ大学の博士課程に留学をしました。留学の後は経済産業研究所に入り、10年間研究をしました。現実の政策に役に立つような理論は何かというのを考えています。

『問題の発見』

Q. 先生の教育理念について教えてください！

学生には、重箱の隅をつつくような視点ではなく、広い視点をもってほしい

と思っています。具体的に言うと、現実の政策との接点を考えて研究をしてほしいということですね。公共政策に興味を持ち、高いモチベーションで主体的に問題を発見してほしいです。容易なことではありませんが、問題をうまく設定することができれば、研究は9割完成した、と言えます。問題を解くよりも、問題を見つけることが重要なのです。

『教科書と現場のバランス』

Q. どうやったら現実に近づきますか？

私もそうですけど、現実の金融機関にいる人だとか、政策当局に勤めている人と接するチャンスを作らなくてはいけないと思っています。学生は社会人と接する機会は少ないので、教科書ばかり勉強していると現実の感覚がわからないと思います。そのギャップを補うためには、簡単に言うと取材に行くことしかないと思います。これはゼミでもあまり行えていないのですが、本当は日銀や、政府の経済官庁とか民間企業の現場の人の話をきくというチャンスを意識的に持ったほうがいい。ゼミでもそのチャンスを作りたいと思っています。去年は一度金融機関の人に来てもらったりしました。今年も何とかそういうチャンスを作りたいとは思っています。

『自身の学生時代を振り返って』

Q. 小林先生の学生時代について教えてください！

もともと工学部の計数工学科の学生でした。実験とかもあったので、文系の学生よりは勉強に割く時間が多かったんじゃないかなと思います(笑)。特に3, 4年の時は勉強中心だった。1, 2年生のときはESSというサークルで活動していました。そのサークルでの他学部の友達との関わりが、社会人になってどういう職業を選ぶかっていうときに影響を与えたりしたので、それはよかったなあと思います。

今振り返ると、その時々で自分の目標や進路が変わっているんですね。最初は物理学者になろうかな、その次は計数工学の研究者になろうかなと思ったり、で、その次はやっぱり社会に出て官庁にはいるということを考えたり……。もし最初に一直線に経済学者になっていたら、もっと効率的だっただろうなあ、という気はするけど、じゃあいろいろやってきたことが無駄だったのかと言われるれば、まあ無駄ではなかったかなと(笑)。いろいろな分野のことを勉強した

ことで、今のものの考え方にもある意味幅が出ているはずだと思う。普通の経済学者とはちょっと違う観点からものを考えたりできると思うので、よかったかなあと思います。

そういう意味では、みんな学生時代にいろいろ進路について悩むと思うんだけど、悩むことは後から振り返ると良かったと思えるので、その都度真剣に悩むといいと思う。

『自身の就職を振り返って』

Q. 経済産業省に入省するという決め手となったのは何ですか？

私は幅広い行政分野に携わりたいと思っていました。経産省が日本の産業界とか経済全体を担当するところだと思っていたので、割と第一希望に近いところでした。本当は福祉とか厚労省も興味はあったんですけど、まあそこで経産省入省の決め手というか、やっぱり行政の持ち分の守備範囲の広さと、面接で会った人の前向きな雰囲気ですかね。会社によっておとなしい会社だったりアグレッシブな会社だったり、会社全体の雰囲気は、就活で会った人を通じて自然と感じとることができます。経産省の全体の雰囲気が他の職場に比べるとアクティブで、いろいろ面白いことができそうだとその当時は感じました。でもそのあと官僚バッシングとかいっぱいあったから今はどうだかわからないけど……(笑)。

Q. 工学科から経済に興味を持つ人は他にもいらっしゃいましたか？

割といますよ。今は国家公務員試験を受けて、経済官庁に入ってくる人の中で毎年1、2人は理科系出身の人が経済職とかで公務員試験を受けて入ってくる。学部卒だったり大学院の修士出てる人も最近は多い。公務員の職種って理科系の試験を受ける職種、技官と、それから事務官っていうのがありますが、もちろん理科系の人技官で入るといのはたくさんあるけど、事務系で、特に経済に興味を持って入るとい人は私の時代にもいたし、今でももっと増える。たぶん政府全体で年に数人以上入っていると思います。経産省だと年に1、2人って感じだと思います。

『ゼミ＝自分で考える訓練の場』

Q. ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

ちゃんと日吉では勉強して、日吉の科目を残さないでほしいなと(笑)。あと、さっきも言ったけれど、問題をとにかく自分で発見するということ。かつそういう気概でゼミに入ってきてほしい。そして興味の対象範囲として、なるべくなら公共政策などに通じるような関心をもって問題を考えてほしいですかね。

経済学者になりたい人もウェルカムっていうか、その方が私としても教え甲斐がある。2年で就職するという人がもちろん大半だと思うけど、そうするとどうしても、経済学の研究まではなかなかできない。やっぱり自分で考える訓練をする場なのだという風に思って入ってきてもらいたい。これから経済学者になるかもしれない、という人であれば、教科書や論文を通してある程度適切な指導はできると思うので、そういう人の中で、理論系で僕がいまやっているような分野に関心がある人はぜひ入ってきてもらいたいと思いますね。

『研究と輪読の両輪』

Q. ゼミとしての活動としてはどんな活動ですか？

3年生が入った時点で、自分の興味関心に応じて、5つくらいのグループに分かれて、3~5人で三田祭や学年末に向けて、自分たちの論文を書くということを目指して勉強してもらっています。その一環として「Modeling Monetary Economies」という英語の教科書の輪読を今年も行っている。つまり自発的な研究と輪読の両方を行っています。また、時々課外活動のような感じで外から誰か来たりとか、学外の何かシンポジウムに私が参加するときに、オーディエンスとして聴講してもらったりしています。成績は、輪読の発表と論文を見て反映するというやり方をとっています。

『自分たちで論文を執筆するにあたり……』

Q. 適格な問題設定のコツはありますか？

うーん、そんな方法論があれば一番いいのですが残念ながらありません。試行錯誤でやるしかない。自分はここが問題だと思うっていう意見を積極的にぶつけてもらうといいと思います。なかなか今のゼミ生もできないんだけど、自分で問題を発見して、これは問題じゃないですか、と僕に言ってもらいたい。だいたいのケースでそれはあまり面白い問題ではないんですけど、ぶつかって失敗するという経験を何回か積むことで、自分のなかで正しい問題の作り方ができてくると思う。だからそういうのを恥ずかしいと思わずに、どんどん

自分で問題を探して、これは研究する価値があるんじゃないかっていうテーマを思いついたらゼミの場で提案してもらいたい。それに対してたぶん僕もダメ出しすることも多いだろうし、他の人からも批判されるかもしれない。この2年間慶應にいる印象では、日本の学生っていうのか慶應の学生っていうのは、そういうガチンコで批判しあう議論っていうのを避ける傾向にあり、ややおとなしいと思う。もう少し、批判されることも批判することも恐れず、議論をしたらいいんじゃないかなと思います。

『学生時代と社会人になってからの自分を思い返して』

☆最後に2年生へのメッセージをお願いします☆

誰でもいうかもしれないけど、古典を読んだほうがいい。自分が社会人になって、あとで読もうと思っていたようなものを読まないうちにどんどん年をとってしまうからね。日吉とか時間がじっくりとれるときに日本文学でも世界文学でもあるいはもっと難しい書物でもいいですけど、なにか世界の古典と言われているようなものをしっかり読んでおくと、社会人になってからも、自分の知的な基盤になってくるということもあると思う。そこは私自身の反省点でもあるんですけど、人類の2000年の歴史でこれは読んでおかなきゃって大人が言うものは、18~20歳くらいの時はなかなか読みたくなる(笑)。でもそうは言わずにちょっと読んでみるということをやっておくと、後々いいのではないかと思います。

自分が社会に出て、会社とか役所とかで務めて、仕事上で判断をしなければいけない時に、昔の本当に偉かった人はどういう考え方をもって決断したんだろう、っていうのを知っておくと、何か自信につながったりしますよね。だから文学作品でもいいしあるいは、カエサルの何とかとかさ(笑)そういうのを読んでおくというのは、自分が行動するとき自信の源になるんじゃないかな。

Q. 先生ご自身が自信につながったなあという古典は何かありますか？

なんだろうなあ。僕はあんまり若いころは古典的な書物についてちょっと敬遠するようなところがあったのであんまり読んでないですけど、「ローマ人の物語」っていうので、ローマの歴史がどうだったかとか勉強して、ギボンの「ローマ帝国衰亡史」を自分で読んだりしていた。それは社会人になった後だった

んですけど、本当は学生時代に読んでおくべきだと思います。

みんな社会にでたら悩むことだと思うんですけど、仕事上、会社とか組織の中で、どういう判断をしたらよいのかとか、人とどのように交渉したらよいのかということで悩んだ。人と人とが関わりあって歴史が動いていくというのはどういう風になっていたのか、実際に自分が経験しはじめると学生時代に関心がなかったことにも関心がでてきた。それがきっかけで、歴史的なものを学びたいと思ったわけです。

こういうことは社会人の経験をして初めてわかることなので、学生時代に古典を読んでいてもすぐ忘れちゃうかもしれない(笑)。そうになると時間の無駄になってしまう可能性もありますけど、関心が持てたら読んでみた方がいいと思います。

【編集後記】

小林先生はとても穏やかな雰囲気をお持ちの先生であり、ご丁寧な対応をしてくださったと感じる。インタビューの中にもあったように、学生には積極性を求めている様子なので、経済学者を目指している、あるいは経済について先生と議論してみたいという2年生は、ぜひ入ゼミを検討すべきだろう。

お忙しい中、快くインタビューを引き受けてくださった小林先生へは心より感謝しております。ありがとうございました。

文責：古郡 みか